

1 はじめに

「災害に負けない支え合いの地域へ」

私たちの日常生活が大きく変わった
平成30年7月の夏。

信じられないくらい雨が降り、信じられないことが起こってしまい、信じたくない現実と直面したあの日から、それぞれの「日常」を取り戻すための歩みが始まりました。

たくさん環境の変化を経験した人、たくさん決断をした人、やり場のない思いに涙がこぼれた人、過ごした時間は決して緩やかなものではなく、今もなお住み慣れた自宅や地域を離れ生活を送る方も多くおられるなか、被災地復興に向けた取り組みや支援活動はこれからがいっそう大切と言えます。

そんななか、発災当初から被災者の大きな支えとなったのは、地域が大切に育ててきた絆や文化を活かした「人と人とのつながり」や「お互いさまの支え合い」でした。

そして、その取り組みは被災地の至る所でその地域に応じた方法で展開されています。

この「被災地発支え合い活動事例集『豪雨二モマケズ 第二版』」は、発災から約半年の地域の支え合い活動を紹介した前回の第一版に続き作成したもので、地域や住民、支援者のこれまでの取り組みと、これからに向けた思いを紹介した冊子です。

災害というテーマだけでなく、高齢化、人口減少、担い手不足、地域の孤立化等すべての地域の課題解決の糸口にもなる支え合い活動や元気な地域づくりの実現に向け、多くの方にこの事例集をご活用いただき、被災地復興や支え合いの地域づくりの一助となれば幸いです。



被災から1年2か月の間、真備町内ではとてもきれいで温かみのある手書きお知らせ「エプロンばあばの見た目のお知らせ」が掲示されたり、配られたりしていました。全19号です。

段々にぎやかになっていく紙面に真備町の復興を重ね胸が熱くなった方は少なくありません。

誰かが描いて貼っているのは、詮索NG。わかっているのは「エプロンばあば」という名前と溢れんばかりの「真備町愛」。これからも「エプロンばあば」は真備町に愛情を注ぎ続けてくれることでしょう。



『NO.9 真備町11月21日(水)PM2° エプロンばあばの見た目のお知らせ』より抜粋